

ティマーの世界に蝶は舞う

ルル一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デジモンとなつた少女は、デジラボの主から依頼を受ける
その内容とは、あるデジタマを回収せよという内容だつた

ティマーの世界に蝶は舞う

目

次

1

テイマーの世界に蝶は舞う

「エリカ～皆を寝かせてきたよ～」

ここにはデジタルワールドに存在するエリアの一つ、デジモンが生まれそして旅立っていく場所、始まりの町。

そこには多くのデジタマや幼年期デジモンそれを世話する芋虫型のデジモンや雪だるまのようないでジモンそして……一人の人間の少女がいた。

「ご苦労様、ワームモン」

彼女の名は御島エリカ、E D E N ネットワークと呼ばれる電腦空間で様々な依頼を解決するハッカーチーム、フリー・ディエの一人だつた少女。

「ユキダルモンは手がいっぱいだから大変だつたよ、元気いっぱいなのも困っちゃうね」

エリカに話しかけてきた芋虫のようなデジモンはワームモン、エリカのパートナードジモンでありもう一人のエリカでもある。

「たまにコロモン達と一緒に騒いてたくせに……」

「う……それは一緒にいて楽しくなつてきちゃつたというかなんというか」

ワームモンにエリカの視線が刺さりワームモンは体をくねらせていた。

「……はあ、まあいい。依頼はもう終わりだから、ユキダルモンたちに挨拶してからみんなのところにもどるよ」

「うん！」

ワームモンの返事とともに二人の存在が0と1にプログラムの光に変換される、光のバーコードが二人を包み込み光が消えると一体のデジモンが現れた。

（ジョグレス進化～てね）

（私たちは合体だと思うけど）

蝶と人間の女性の姿併せ持つデジモン……フリー・ディエモンはユキダルモンたちに依頼の報告を終えてから背中の翼をはためかせ自分

たちの住処へ向かつた。

始まりの町があるエリアから離れた場所そこに彼女の暮らす家がある。

デジタルワールドにはさまざまなエリアがあるが元人間である彼女が暮らしていくにはちょうどいい住処になる場所はあまりなかつたはなかつた。

なのでこの家は彼女とデジモンたちが協力して建てた家である。ちなみに完成するまでに様々なドラマがあつたが今回は割愛する。そんな家の前に一体のデジモンが立つていた。

どうやら彼女の帰りを家の前で待つていたらしい。

家に着いたフードイエモンはエリカとワームモンに戻り家の前に立つてているデジモンを見る。

そのデジモンはフードイエの一人である人物が彼女が寂しくないようとに一緒に送り出したデジモンたちの一体。

両腕にドラモンキラーと呼ばれるかぎ爪を身に着け背に勇気の紋章が刻まれている盾ブレイブシールドを装備した究極体デジモン、ウォーグレイモンだ。

「おかえり、エリカ」

「ただいまウォーグレイモン」

「今日の依頼はなんだつたの？」

「始まりの町でユキダルモンたちの手伝い」

「つかれた！」

「はは、それは大変だつたね」

「みんな元気すぎー」

イーターの事件から数か月、デジタルワールドは復興に向けて活動していた。

イーターの捕食により穴だらけになつてしまつたデジタルワール

ドだが、イグドラシルの復活とその配下であるロイヤルナイツ達による尽力により修復が進み元の姿を取り戻しつつあった。

エリカたちは修復中の「デジタルワールド」で起こる様々な問題などを解決するトラブルスター、つまり「デジタルワールド」でのフレディ工として問題解決に奔走していた。

「それで次の依頼は何?」

「それなんだけど……ミレイからだよ」

「御神楽ミレイから?」

御神楽ミレイ、「デジタルワールド」にエリカたちが来た際に一番最初にあつた人物である。

最初は何者か怪しんだエリカだつたが一緒にいたデジモンたちが親しく接していたので悪い人物ではないとはわかつたが、その雰囲気からか若干苦手にしている人物である。

「どんな依頼?」

「ええと読むね……」並行世界に流れて行ってしまったデジタマの回収をお願いしたい』だつて

「並行世界にデジタマが?……詳しい内容はミレイ本人に聞くしかな
いみたいね」

「明日の朝マスティモンが迎えにくるつて」

「わかつた、なら今日はもう寝ることにする」

「以来のことは僕からみんなに話しておくよ」

「ありがとうオーグレイモン、じゃあおやすみ」

「うん、おやすみエリカ、ワームモン」

エリカは明日に備え寝室へ向かつた。

「ようこそデジラボへ寝過ごさなくて何よりだわ」

「私は寝坊助なんかじゃない」

「ふふ、ごめんなさい」

次の日の朝、迎えに来たマスティモンと共にエリカとワームモンはデジラボにやつてきていた。

「で、並行世界にデジタマが流れていったってどういうこと?」

エリカは依頼人であるミレイに詳しい事情を聴き始めた。

ミレイは、エリカとの間の空間に地球儀のような球体を出現させた。

エリカがその球体をよく見て見ると、どうやらそれは現在のデジタルワールドでの様だつた。

ミレイは静かに話し出す。

「知つての通りあなたのいるデジタルワールドはイグドラシルとロイヤルナイツ、ほかにも多くのデジモンたちの手によつて修復にされ行つて いるけどまだまだ空間が不安定で、時折穴が開いたりするみたいなの」

「穴? その穴が並行世界に繋がつてるの?」

「ええ、これを見て」

ミレイがデジタルワールド地球儀を消して、いくつかの画像を映し出した。

そこには、エリカにはよく知る場所が映し出されていた。

「……もしかして新宿?」

「マステイモンに軽く調べてもらつたら、どうやら並行世界の新宿みたいでね、あなたならちようどいいと思つて依頼した次第なの」

エリカは少しばかり驚いていた。

並行世界だと いうのだからその場所は地球なのだとは思つてはいたが、寄りにもよつて新宿だとは思わなかつた。

それと同時に、また新宿の大地を歩けるのかと思うと少し不思議な気分だつた。

おそらくそこにフードイ工はないのだろう、だけどそこで活動していた者としては同時に感慨深い気持ちにもなつっていた。

並行世界とは言え、ある意味里帰りのような物だろうかとエリカは思つた。

「それともう一つ、流れて行つてしまつたデジタマのことを話してお

こうと思う

「もしかして、ただのデジタマじゃないの？」

エリカとワームモンの頭に浮かぶのは、ゆらりゆらりと楽しそうに揺れる様々な模様のデジタマ達だつた
ユキダルモンやほかのデジモンたちが甲斐甲斐しくお世話をしていたことを覚えている。

ミレイが言うデジタマとは、二人の知らない何かがあるというのだろうか。

「そう、数は七つ。そしてそのデジタマというのが……」

周囲へと焼きたてのパンの匂いを漂わせる店がある。

看板にはまつだべーカリーと書かれていて、並べられたパンは総菜パンや菓子パンなど様々な種類の物が置かれているようだつた。
その中でも子どもにオススメ！ と宣伝されているパンは、恐竜のような形をしたパンだつた。

店の中の工房を覗いてみると、二人の夫婦が生地をこねてパンを作つていて、そして一人の少年が手伝いをしているようだつた。
「タカトーこれ並べてきてー」

「はーい」

タカトと呼ばれた少年が母親から焼き立てのパンを受け取り、店に並べようとした時だつた。

「ん？」

彼は突然、近くの窓から空を見上げた。

空には雲が浮かんでおり、曇り空となつていて。

「どうしたのタカト」

突然止まつた息子に、母親が心配して声をかける。

「え？ あつ何でもないよ、気のせいだつたみたい」

「あらそ？ ジヤさつさと並べてきてちようだい」

「はーい」

そう言つて少年は焼き立てのパンを並べに向かつた。
パンを並べる少年のエプロンの下のベルトには、金色のスキヤナ
ののような端末がうつすらと輝いていた。

新宿上空、雲に紛れて深い霧が現れる。

それは、デジタルゾーンと呼ばれる特殊空間だ。

その空間はデジモンが現れる際に生み出される特殊な空間だつた。
デジタルゾーンの中に現れたのは、蝶のような姿をした人型デジモ
ン、フードイエモンだつた。

「無事についたみたいだね」

雲の中からこの世界の新宿を見下ろした。

（広いなあ……見つけるの大変そう……）

（弱音を吐いてる場合じやないよ、早く見つけないとこの世界も危な
いんだから）

ワームモンと会話しながら、エリカはミレイが言つたこと思いだし
ながら一言つぶやいた。

「……七大魔王デジモンか」

エリカの胸中には、小さな不安の種が生まれていた。